

Title	会計行為の目的,機能 : 安藤英義のraison d'etre
Sub Title	The Purpose and Function of Accounting
Author	友岡, 賛(Tomooka, Susumu)
Publisher	
Publication year	1990
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.33, No.2 (1990. 6) ,p.119- 121
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19900625-04055755

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
33 卷 2 号
1990 年 6 月

研究ノート

会計行為の目的, 機能

—安藤英義の *raison d'être*—

友 岡 賛

—安藤英義「簿記および会計の空洞化」『企業会計』第40巻第9号, 1988年9月に共感。



本稿は, 安藤英義のいうところに左袒しつつ, 会計という行為の *raison d'être* を再考する。



会計行為の目的は<意思決定に資すること>, これの機能は<情報の提供>にある, とする立場がこんにち支配的となってきたようである。

「会計の情報化」[p. 45], 「情報優位の会計」[p. 46]と安藤はこれをいう。

「会計の目的ないし本質を意思決定情報の提供に求める」[p. 45] 立場の殷盛。

さりながら, 「会計の情報提供機能は, 利害調整という会計の本来の機能とは一線を画する必要がある」[p. 45]。

—同感。

会計行為, これの目的は<利害の調整>にある。

がしかし, 会計の情報化は会計の空洞化をもたらした。

「会計の情報化は, 会計の本来の機能を空洞化する方向で作用している」[p. 45]。

「会計の情報化は, 会計の空洞化を通して, 結局, 簿記の空洞化をもたらしているのである」[p. 46], と安藤はなげく。

—友岡賛もともになげこう。



安藤のいう会計の空洞化は, たとえばいわゆる重要性の原則の存在にみいだしうる。

「財産をめぐる取るか取られるかの利害の線引き

に, ……『重要性の原則』等論外」[p. 46]。

簿記の空洞化とは, 帳簿記録軽視の<決算中心主義>化のことであり, 補助簿軽視の<主要簿偏重>化のことである。

「利害調整のための簿記・会計には, 客観的証拠に基づいた帳簿記録が不可欠」[p. 44]であり, 財産の所有の関係ならびに債権および債務の関係の直接的な管理は, 補助簿によりおこなわれる。かかる関係にかんする主要簿のやくわりは間接的なものにしかすぎない。と安藤はいう。

簿記があって会計がある。会計の *Merkmal* をどこにおくか。



「情報とは, それを知らなければ損をすることがあるといった性格のものであり, せいぜい間接的な利害関係において本来の意味をもつ」[p. 45]ものにしかすぎない。

会計行為のまづもつての機能は情報の提供にあるのではない。

「財産に関して自己を他人から守り, 自己と他人との利害の線引き……をする必要から, 簿記は生まれた」[p. 44]。

よって, 利害の調整こそが, 「簿記およびそれに基づく会計に本来的な役割」[p. 44]なのである。

会計行為は当事者の目のまえの利害にじかにかかわるものである——が, 情報の提供はそうではない。

財産を「取るか取られるかという直接的利害に関する事柄は, 情報以前の, むしろ『本人にとって現実の問題』」[p. 45]なのである。

情報いぜん。

◇

会計は、〈報告〉、〈説明〉である。

財産の運用行為の受託人より財産の運用行為の委託人への報告、説明。財産運用人の職の遂行の状況につき、しらせつげる行為。財産運用人の職における責任のはたしかたのてんまつにかんする報告行為。利益の有無ないし金額のかくある根拠をしめす行為。財産運用人の職における責任をはたした成果にかんする説明行為。

報告、説明の目的は利害の調整にある。

◇

〈報告、説明と情報の提供とは同義ではない〉。

報告、説明は、——まさに、みずからを他人よりも、利害にかんし、みずからと他人とのあいだの線ひきをするためにする行為である。

会計は、報告、説明である。

◇

そもそも目的観なるものは各人かくようであってよい。これ言をまたない。

会計の空洞化、簿記の空洞化さえもたらさなければ、ここに本稿の課題はない。かもしれない。

けっきょく、会計の空洞化とは、会計が会計たりえなくなるということである。情報という概念の濫用により。

報告、説明がおきざりにされる。

簿記の空洞化とは、簿記が簿記たりえなくなるということである。決算なるものの偏重により。

帳簿記録がおきざりにされる。

◇

会計行為の目的は意思決定に資することにある、とすることに首肯はしかねる、——とはいえ、本稿の目的観をもってして、かかる立場これじたいを否定するものではない。

ただし、あくまでも、ほんらいの目的をはたしたうえでのことである。

一步ゆずっていうに、副次的な目的。

いやいや、ゆずりすぎか。

意思決定のための情報の要求、くさぐさの利害関係

人よりの要求がたかまり、これにこたえうるものとして会計があった。としておく。

◇

簿記があって会計がある。会計の Merkmal をどこにおくか。

安藤は、簿記の過程を帳簿記録と決算とに大別し、前者軽視の現況をうれえる。

決算の存在をもってして会計とするむきがある——が、極言するに、〈たとい決算がなくとも会計たりうる〉。

報告、説明の予定されているばあいには、帳簿記録これのみであっても会計である。

財産の管理行為、より具体的には運用行為、これに直接かかわる帳簿記録、これが報告、説明を予定し、なされていれば会計である。

◇

もっとも、安藤には、報告、説明につき直接の言及はない。

会計行為の目的を利害の調整におき、情報いぜんの問題、と安藤はする。——まさに、報告、説明は情報いぜんの問題なのである。

利害の調整のためにする報告行為、説明行為こそが会計行為である。

◇

むろん、意思決定のための情報の要求がたかまり、これにこたえうるものとして会計があり、これの副次的な機能としての情報の提供の認識をみた、といいうるかもしれない。

あくまでも、副次的な目的、副次的な機能としての認識にたつのであれば、本稿はない。かもしれない。

安藤もあえていわない。

「会計が………本来の機能を果たした上で情報化するのなら問題はない」[p.45]。

◇

——が、問題はおおいにありそうである。

◇

方今の潮流、会計の情報化の潮流のなかにあつて、安藤の所説の *raison d'être* はおおきい。

【附記】

安藤は、一橋大学商学部の教授。

本稿は、中央経済社よりの依頼により、友岡賛「会計行為の目的, 機能」『企業会計』第42巻第6号、1990年6月として、同誌の *Salon de Critique* 欄のため、執筆した評論であった。

——がしかし、この原稿および初校の段階にて、友岡と同社会計編集部とのあいだに意見の齟齬がしょうじたため、本日、急遽、同誌への掲載をとりやめ、本誌へ掲載することとした。

1990年4月26日記